

第 41 回吉岡彌生記念講演会 (第 372 回東京女子医科大学学会例会)

日 時 2025 年 5 月 22 日 (木) 13:20~16:00
会 場 東京女子医科大学 弥生記念講堂 [定員 70 名]
同時配信 <https://us06web.zoom.us/j/81606296116?pwd=agrXU2aBGcEbmiG2VyAM2GCviiByz.1>
※後日、オンデマンド配信いたします。

司会 (幹事) 西井明子
会長挨拶 (東京女子医科大学学会 会長) 三谷昌平

令和 7 年度研究奨励賞授与式 13:25~13:30

選考経過報告と授与 (東京女子医科大学 学長) 三谷昌平

吉岡彌生研究奨励賞
応募なし

吉岡博人記念総合医学研究奨励賞
研究代表: 倉田 厚 (人体病理学・病態神経科学分野 教授)
共同研究者: 山口淳一 (循環器内科学分野 教授)・吉澤佐恵子 (病理診断学分野 講師)
脈硬化進展を予防する動脈内膜平滑筋の分化成熟機序の解明

研究奨励賞受賞者研究発表 13:30~14:10

座長 (幹事) 中村真一

令和 4 年度吉岡博人記念総合医学研究奨励賞
研究代表: 宮田麻理子 (神経生理学分野 教授、平成 3 年卒)
共同研究者: 金谷萌子 (神経生理学分野 助教)・石津綾子 (顕微解剖学・形態形成学分野 教授)・
望月牧子 (顕微解剖学・形態形成学分野 助教)・大月道夫 (内分泌内科学分野 教授)
痛覚の性差形成に関わる発達期性ステロイドホルモンの役割

令和 6 年度吉岡彌生研究奨励賞
飯嶋 睦 (脳神経内科学分野 教授、昭和 62 年卒)
パーキンソン病の QOL 低下の要因

第 41 回吉岡彌生記念講演 14:30~16:00

座長 (東京女子医科大学学会 会長) 三谷昌平

清水 治 (学校法人東京女子医科大学 理事長)
ご挨拶

安達知子先生 (恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育病院 院長、昭和 53 年卒)
吉岡彌生先生の精神から学ぶ
牧野百恵先生 (日本貿易振興機構アジア経済研究所 開発研究センター 主任研究員)
実証経済学からみるジェンダー格差

〔令和4年度吉岡博人記念総合医学研究奨励賞受賞グループ研究発表〕

痛覚の性差形成に関わる発達期性ステロイドホルモンの役割

(¹神経生理学分野, ²顕微解剖学・形態形成学分野, ³内分泌内科学分野) 宮田麻理子¹・金谷萌子¹・植田禎文¹・石津綾子²・望月牧子²・大月道夫³

痛みの感受性は一般的に、女性は男性よりも過敏であり、この傾向は、哺乳類全体において種を越えて保存されている。しかし、そのメカニズムは十分に明らかになっていない。ヒトにおいては胎生期後期の性腺ホルモンの暴露が、脳の性分化に深く関わりとされているが、痛みの感受性の性差形成に関わっているかは未だ不明である。

マウスにおいては、出生当日に雌にテストステロンを投与すると、成体になると雄のような生殖行動を示ようになる(雄化雌マウス)。このことから、生殖行動は性ステロイドホルモンにより規定されることが示されている。我々は雄、雌、雄化した雌マウスの成体になってからの蹠内ホルマリン注射誘発炎症性疼痛行動(ホルマリンテスト)を観察した。その結果、雌マウスでは雄マウスよりも疼痛行動が強く、より痛みに過敏であることが確認された。興味深いことに、雄化雌マウスにおいては、疼痛行動が雄マウスと同程度に抑制されていた。一方で、成体になってから雌マウスにテストステロンを投与しても、疼痛行動は雌と同様に強く、雄マウスほどには減弱しなかった。また、熱痛刺激に対する脊髄反射には性差が認められなかったことから、炎症性疼痛に見られる性差には、脊髄上位の機序や免疫反応が関与している可能性が示唆された。実際に、雄化雌マウスでは雄マウスと同様に、ホルマリンテストによって下行性鎮痛経路がより強く活性化されていた。このことから、脳内神経回路における鎮痛経路の賦活化が、雄化により促進されたことが示唆された。一方、雌マウスにおいて疼痛行動を制御すると言われるT細胞は、雌も雄化した雌も両方で上昇することから、炎症性疼痛において性に依存した生体反応であり、今回の疼痛行動の性差には寄与していないと考えられた。

以上の結果は、生後早期における性ステロイドホルモンの暴露が、脳神経回路における鎮痛経路の機能に影響を及ぼし、それにより痛覚行動における性差が生じることを示唆している。

〔令和6年度吉岡彌生研究奨励賞受賞者研究発表〕

パーキンソン病のQOL低下の要因

(脳神経内科学分野) 飯嶋 睦

〔背景・目的〕パーキンソン病(Parkinson's disease: PD)は進行性の神経変性疾患で、高齢化に従い患者数が増加している。PD患者における生活の質(QOL)の低下要因には、運動症状とともに非運動症状の関与が報告されている。本研究ではPDのQOLに及ぼす要因を罹病期間別に検討した。

〔方法〕当科のPD患者を対象として、年齢、性別、罹病期間(5年以下を早期群、5年超を進行期群)、臨床症状はMovement Disorder Society Unified Parkinson's Disease Rating Scale(MDS-UPDRS) part I(主観的運動症状)、part II(主観的非運動症状)、part III(医師による運動症状)、part IV(運動合併症)、認知機能(MoCA-J)で、QOLはThe Parkinson's disease questionnaire-8(PDQ-8)により評価した。

〔結果〕102名が登録された。PDQ-8スコアは罹病期間、MDS-UPDRS part I~IVスコアと正相関した($p < 0.05$)。病期別では、早期群ではpart I~IIIと、進行期群ではpart I、IIのみに相関を認めた。QOLに影響する因子はMDS-UPDRS part IとIIであった。

〔結語〕PD患者のQOLは自覚的な運動・非運動症状と関連したことから、QOLの維持にはpatient reported outcomeを重視し、個別化医療を提供することが必要である。